シンガポールの旅

津守　真

どこの国の幼稚園、保育所を訪問しても、壁に子どもが絵を描いてあるのを見ると楽しくなる。

シンガポールの幼稚園で、壁に貼られた大きな紙に、沢山の絵が描かれていて、そのひとつひとつに私は思わず惹きつけられて見入った。大人の背の高さに描かれた人の頭から出た二本の足は、長く伸びて、床にまで届いていた。錯画期の子どもの往復線は、中央で交錯する往復線によって十字のように描かれていた。先生を描いたのだという別の人物画は、ぐるぐる回る渦巻きから成っていた。いずれも力強く、子どもの内側からあふれ出た

ものであることは明らかであった。私共に昼食のスパゲッティを用意するのに忙しい若い先生を引き止めて、ひとりひとりの話を楽しんだ。

七月末に、シンガポールで、ＯＭＥＰアジア太平洋地域理事会とセミナーが開かれ、その際にいくつかの幼稚園、保育園を見学する機会があった。最初は庭のない幼稚園に戸惑いを感じたが、一年中、今年の日本の夏のように暑い国では、子どもたちを太陽の熱から守るために、ブラインドで窓をおおって室内で過ごす必要性が、じきに分かった。文字や数の指導が幼稚園に求められるこの地の一般的傾向の中でも、子どもの主体的な遊びを重んじてそれを実現したいと思っているのだと、その幼稚園の園長さんは私に言われた。日頃のその地道な努力がなかったら、子どもの心が表現された描画は生まれないだろう。帰り際、園長さんは、私に、若い先生を励ましてくれて有り難うと礼を言われた。

タイ、フィリピン、マレーシア、フィジー、ニュージーランド、オーストラリアなどから八〇人程、シンガポールから二〇〇人程集まって、セミナーは盛会だった。今回のテーマは、「すべての子どもたちに学習を容易にするために」だったが、障害をもつ子どものことが多く含まれていて、私にも何かレポートしてほしいと委員長から頼まれていた。主題講演は、米国で聴覚障害を専門とするホッホマンという、シンガポールの大学の客員教授だった。これまで、すべてのことを知っているとみなされる専門家が中心にいて、親や

先生を教え指導するのが障害児教育であると考えられて来たが、今や、そのことは、コペルニクス的転回をしつつある。中心にいるのは、子どもと家族であって、専門家はそれを周縁で支援する人であるというのが主題講演で強調された点であった。私は日本でもこれまでその逆の考えが支配的であったことを思った。アジア各地からの個人発表でも、子どもに即した考え方が多かった。〝ビヘイヴィア・モディフィケーション〟と題するレポートでも、否定的な強化はさまざまな逆効果が出るのが実際であることが報告され、また、多動の子どものケース研究では、終始一人の子どもの具体的なことが話題となった。そのレポートをされた先生の養護学校は、市の中心部からすぐの場所にあり、あと一日あれば私を案内できたのにと残念がられた。その学校は幼児から高等部まであるが、庭がない。校長先生はニュージーランド出身の女性で、ニュージーランドのように子どもの施設には庭が欲しいと思い、市に要請して、数年後に庭ができるのだと話された。考えは進歩的なその先生が、実際に多動の子どもと毎日どのようにして過ごしているのか興味深かった。こういう子どもたちについての悩みは世界共通である。

セミナーに先立って、アジア太平洋地域のＯＭＥＰ理事会が開かれた。その開催はこの地域のＯＭＥＰ副総裁である土山先生の尽力によるところが大きい。それは終始和やかに行われたが、一つの事件があった。シンガポールＯＭＥＰが、ユネスコ代表を招待したと

ころ、野蛮な刑罰や疑問視される法体系をもつ国からの招待を受けることはできない、という断り状がきた。米国の少年がシンガポールで鞭打ち刑の判決を受けたことが、日本でも新聞に報じられたとき、私はこんなことが現代にありうるのかと思った。シンガポールの人の話によると、そのことは現地ではほとんど知られていないとのことで、実際には、形だけの刑であるらしいが、問題はそのこと自体ではない。理事会の席で多くのアジアの人たちが言ったことは、人種、国籍、宗教、政治信条の別なく、子どもの幸福のために協力するのがOMEPであるのに、その会合にこのような理由で出席を拒否するのは、OMEPの精神と規約に反するのではないかということであった。アジアの人たちのそれぞれが、個人として、明瞭に自分の意見を述べ、それを決議にまとめてゆく会議の進め方に私は感心した。

シンガポールは、かつて英国の植民地であった。小さな島であるが、現在は一独立国である。住宅は殆どが高層住宅になり、自然保護も計画的になされ、清潔で緑の多い、近代的な都市、アジアと世界を結ぶ交通の要地である。かつての漁村の面影は全くない。

帰路、チャンギー空港にゆく途中、私は、タクシーの運転手に頼んで、チャンギーの海岸に立ち寄ってもらった。それは五年前に亡くなった私の兄が、敗戦後に、シンガポールで英国軍の捕虜になり、三年半、チャンギーで港の使役をさせられていたからである。兄

は、昭和十七年に入隊し、スマトラで三年間、陸軍一兵卒として過ごし、最後まで将校にならず、兵長であった。日本への帰還船がシンガポールに立ち寄ったとき、そこで留められたのであった。当時大学生であった私は、何人かの友人とともに、シンガポール抑留者の帰還促進運動をした。英国大使館に陳情にゆき、赤門の前に立ち、毎月のように父と横須賀に復員船を探しにいった。昭和二三年にようやく帰って来た兄は、シンガポールのことをあまり語らなかった。あらゆる労働をしたとだけ言っていた。私は今回の会議を終えるまで、シンガポールを兄と結び付けて考えていなかったのだが、帰り際に地図を見て、チャンギーという名が空港の場所の地名であるのを知り、立ち寄ってみようという気を起こしたのである。チャンギーの海岸近く、大きな刑務所があり、軍隊の兵舎があった。シンガポールはいまも徴兵制度である。十八歳から、二年半の義務である。砂浜はキャンプ場になっていて、若い人たちが海水着姿で歩いていた。ジョホール海峡を隔てて、向こう側に緑の丘が見えるのがマレー半島だと運転手が教えてくれた。いま、港はマレーシアにゆくフェリーに使われているだけである。私はタクシーをおりて、しばらく海を眺めてたたずんだ。朝の太陽が水平線に昇ったところだった。この同じ場所で、五〇年前に、いつ日本に帰れるかも分からずに暑さのなかで労働をしていた人たちがいたことを、知っている人は今は殆どいない。

この五〇年間を生きた者の目から見ても、世界は激しく変化した。基調講演でホッホマンが述べたように、いまや、専門家が中心に位置するのではなく、家族と子どもが中心にいて、それを支えるのが専門家である。保育と教育において特にそうである。あと一年後にはＯＭＥＰ世界大会が横浜で開かれる。変化する世界の一端を担う会合である。

（愛育養護学校）